

英語教育における語彙と辞書指導に関する考察と
現場への示唆

On the Discussion of Some Aspects of Vocabulary and Dictionary Teaching
and Learning of English Language Education

古家 貴雄
Takao FURUYA

英語教育における語彙と辞書指導に関する考察と 現場への示唆

On the Discussion of Some Aspects of Vocabulary and Dictionary Teaching and Learning of English Language Education

古家 貴雄*
Takao FURUYA

1. はじめに

語彙の知識は英語のあらゆる面に関わってくる。しかし、その割には、その習得について個人の努力に任されていることが多く、語彙の体系的指導ということが英語教育で取り上げられることはあまりない。したがって、本論文では語彙習得のメカニズムや記憶に有効な語彙の学習法、辞書の指導等、語彙に就いて多様な観点より論述してみたい。

今回、取り上げる語彙に関する論点は以下の7つである。①これまでの語彙学習・語彙指導の問題点、②新学習指導要領で求められる語彙力、③語彙習得のプロセス、④語彙記憶のメカニズム、⑤語彙の学習法、記憶法、⑥未知語推測の効果に関する条件、⑦電子辞書の英語学習における有効性と弱点。

2. 語彙学習の意義とねらいについて

英語学習において語彙の重要性を否定する人はいない。英語を聞く、話す、読む、書く、そのすべての技能において語彙や表現を知っているかどうか、理解や発信の成否の分かれ目になると言えるからである。しかし、これまで英語教育においては、授業の中で語彙を系統的且つ組織的に教えられたというケースは少ないのではないだろうか。語彙、あるいは単語を「知る」、「知らない」の違いというのは、英語学習においてどのような意味を率直に持つのだろうか。例えて言うと、文章を理解する際においては、ジグソーパズルをする時の絵のピースは揃っているか、それとも足りないかの違いに相当すると考えられる。語彙の数が少ない、つまりピースが少ないということになれば、ジグソーパズルの絵は完成しないばかりか、所々穴あきで、絵全体が認識できない、つまり、文章なら内容理解に多大な障害が出るのと同じことになる。

またその一方で、語彙をたくさん知っていれば文章がよく理解できるかということも単純なことではないだろう。ある語彙、特に多義語についての理解を例にとると、ここに“held”という語が繰り返し使用されているある文章があるとする。語彙が1つの文章の中で比較的近くに登場する例である。それは、以下のような文章である（寺内他、1997）。

The mayor of the town invited people from all over the country to take part in a “love letter” contest he ① held last year as part of effort to promote his town... You ② held me in your strong arms for only a fleeting moment.

ここに登場する多義語の“held”は“hold”の過去形で、“hold”の辞書に載っている初出の意味は「つかむ」とか「握る」の意味である。したがって、“held”の意味は、「握った」や「つかんだ」の意味だと解釈し、の文章の中での“held”の意味解釈をしようとするだろう。また、さらに厄介なことには、ここでの2つの例文の“held”の意味はそれぞれ異なっている。下線①の“held”は「開催した」の意味で、下線②の“held”は「抱きしめた」になる。つまり、“held”あるいはその原形の“hold”は、複数の意味

*教育実践創成講座

を持つ多義語だということの認識が各文章の正確な意味理解の前提となっていると言える。

以上に述べたことを総合すると、語彙の学習には大きく2つのことが重要になるということである。1つ目は、英文という全体の絵が分かるべく、なるべく語彙(単語)の数を増やすことが重要であるということ。そして2つ目は、語彙の数をただ増やせば良いのではなく、語彙(単語)の文脈の中での意味を正確に決定できることが重要だ、ということである。特に後者は、語彙の意味範囲の認識を増やしたり、ニュアンスが理解できるようになるということと同意である。ただし、後者の能力や技能を習得することはかなりの困難が伴い、また時間のかかることである。このことについて例えば Hasegawa(2016)の研究によれば、日本語訳を用いた暗記学習で新たに登場した語彙を仮に覚えたとしても、その語彙を新たな文脈の中で理解できる割合は5~6割に過ぎないということだからである。

本論文では、以下、英語教育における語彙指導上の問題点から入り、新学習指導要領で提案された語彙指導の基準について概観し、語彙学習の原理に就いて提示し、実際の語彙指導に関する方法やヒントについて中心に論じていく。最後に、語彙の自律学習に欠くことのできない辞書の指導についても触れたい。

3. 英語教育における語彙指導の問題点

ここでは、語彙指導における英語教育現場でも問題点を挙げてみたい。1つは、学習者の語彙習得、あるいは学習上の問題点を挙げる。これは日々の指導の中で多くの教師が感じていることであると思う。

- (1) 学習者の語彙の知識がなかなか身に付かない。新出語句・語彙をなかなか覚えてもらえない。
- (2) 知識としての語彙の数は増えても、それを発話の場面で使用できない。使える語彙が簡単には増えない。
- (3) 英語学習の中での語彙の占める位置は学習者の中で大きいと思われるが、直接、さらに学習者に合った方法で語彙指導ができない。
- (4) 語彙指導についての様々な側面を指導できない。発音、スペリング、意味の指導で精いっぱい、語についての連語(collocation)や語用法等についてはほとんど触れられない。
- (5) 日常レベルの簡単なことを表現する語彙を教える機会が少ない。クラスルーム・イングリッシュを教室で多用するようには心掛けているが難しい。

次に、英語教育における語彙指導の過去の問題点をいくつか挙げることにする。

- (1) 語彙指導は、文法指導に比べて授業の中の指導という点で軽視されてきた。
- (2) 語彙を増やすことについては、ほとんど学習者の個人学習に任されてきた。
- (3) 語彙に関する指導方法のバリエーションが多くなかった(原則として、暗記、英語と日本語との併記リストの記憶等)。
- (4) 仮に教師が必要だと思っても、限られた授業時数の中で、語彙指導に割く時間をあまり取れない。
- (5) 語彙の様々な側面を深く教えきれない。
- (6) コミュニケーションを英語で行うために使用する語彙の絶対量が学習者の方に足りない。
- (7) 授業で教えられる範囲を指定して、そこで実施される語彙テストの成果、定着の効果がほとんど検証されない。
- (8) 理解のための語彙と発表・発信のための語彙とを指導上区別して教えられてきていない。

以上の語彙指導上の問題を踏まえて、次に新学習指導要領で、語彙についてどのようなことが提言されているかを見ていきたいと思う。

4. 新学習指導要領で求められる語彙の力

ここでは、語彙指導における問題点を踏まえながら、平成29年告示の新学習指導要領で求められる語彙の能力や重要視される語彙の側面について考えていく(文部科学省, 2018; 文部科学省, 2018)。

まず、教育現場で扱われる各学校段階の語彙の数が各学校段階でとても増えたということがいえる。これは扱われる英語の技能が五つの領域となり、それらの目標を達成するためにより豊かな語彙が必要となるからなのだろうと思われる。具体的には、小学校の外国語活動と外国語とで600～700語程度の語が知識及び技能の内容として示され、中学校では、旧指導要領で言語材料として示されていた指導する語の1200語程度から、新指導要領では1600～1800語程度の語となった。さらに高等学校では、旧指導要領において、「コミュニケーション英語Ⅰ」にあつては、中学校で学習した語に400語程度の新語を加えた語、「コミュニケーション英語Ⅱ」にあつては、さらに700語程度の新語を加えた語、「コミュニケーション英語Ⅲ」にあつては、それに示す語に700語程度の新語を加えた語、総数として1800語程度の語の学習が示された。これが、新学習指導要領では、「英語コミュニケーションⅠ」において、小学校及び中学校で学習した語に400～600語程度の新語を加えた語を、「英語コミュニケーションⅡ」では、さらに700～950語程度の新語を加えた語を、「英語コミュニケーションⅢ」では、それに示す語に700～950語の新語を加えた語を学習するとされている。つまり、高等学校では、以前の1800語程度から、新学習指導要領では、1800～2500語の学習が想定されていることになる。そうすると、小学校、中学校、高等学校で最大5000語の語彙学習が求められるということになる。

もちろん、5000語を上限とすることではないだろうし、また、個人の英語の内容に関する興味・関心によってその数は異なってくるだろう。さらに、この5000語というのはあくまで、この後述べる受容語彙が想定されたものといって良いと思う。

さて、次に重視される事柄としては、語彙指導において、語彙を受容語彙(*passive vocabulary*)と発信語彙(*active vocabulary*)に分けて指導されるべきだということだ。受容語彙とはNation(1990)によれば、出会ったときに単語を認識し、意味を思い出せる語彙のことで、語彙の意味は知っていても使うレベルにはいない語彙のことを指す。一方、発信語彙とは、適切なおきに必要な単語をいうこと、書くことができる語彙のことで、語彙を理解し、さらに使えたり表現できたりする語彙のことを指すといえる。

Melka(1997)は、この受容語彙から発信語彙への段階を4つにまとめている。それは、①模倣と理解を伴わない再生の段階、②理解だけの段階、③理解を伴った再生の段階、④表出の段階である。

つまり、語彙というものは、まず、意味も分からずたくさんの文脈に触れながらその存在を意識し、文脈を伴った相手とのやり取りの中でその意味を理解し、その後、色々なやり取りや文脈を通じて表現している内に、やがて語彙を意図的に使えるようになる段階に至り次第に習得していくものであるということになる。また、学習する語彙については、学習者の負担等を考えるとすべて表出できる必要はなく、一方で動詞を中心に発話の機会を増やすべき語彙が特にあり、また他方で、実際の指導の中で語彙の学習をその意味理解のみに限定する場合もあるということである。

さて、最後に語彙指導における教師の注意点を述べる。1つには、ただ、やみくもに学習者の語彙数を増やすことに力点を置かないことである。小学校から高校に至る段階的な語彙習得を目指すべきで、ふんだんな文脈提示、その繰り返しの中から数多く語彙に触れさせ、その意味やニュアンスを理解させ、活用や使用の文脈を増やししながら徐々に語彙の多くの側面を理解させ次第に定着させるよう心掛けるべきである。2つ目には、語彙を単独に覚える方法と4技能等の文脈を伴った方法で覚える方法のバランスを取るよう学習者を指導して欲しいことである。語彙の習得には量と質の両方がどうしても必要となるだろう。なぜなら、学習の偏りは結果的に多くの語彙の定着に貢献しないからだ。3つ目に、語彙習得に関して、先にも述べたが、個人の英語や英語の内容に関する興味や関心を重視するということ

である。つまり、個人が持つトピックへの興味や関心によって、学習する語彙の種類や中身は自ずと異なる可能性があるということである。逆にいえば、語彙の種類や分野を限定せず、学習者の意欲によって語彙を増やしてあげるのが好ましいだろう。4つ目に、語彙学習に関する方法や経験を学習者自身に記録させることを奨励することである。語彙の学習方法にはやはり、個人差があるのが現状だ。自分に得意な方法やうまくいった経験を記録させ、その後の学習計画をさせると彼らのメタ認知能力も開発することができる。

いずれにしても、語彙学習はこれからの英語教育における鍵になりそうである。教師は、個々の学習者の語彙の学習の様子に着目し、その方法開発に教師として協力してあげてもらいたい。

では、次に、語彙学習や習得について、いくつかの研究知見を見ながら、語彙指導に関する問題に対処する方法を考えていくことにする。

5. 語彙学習の原理について

第二言語において我々はどうのように語彙を覚えていくのだろうか。それは次の5段階であると考えられている (Hatch and Brown, 1995)。

- (1) 新しい語彙に遭遇する。
- (2) 語形を理解する。
- (3) 語彙の意味を理解する。
- (4) 記憶に残っている語形と意味を統合する。
- (5) 語彙を実際に使ってみる。

以上を見てみると、語形と意味とをどのように頭の中でネットワーク化して連携させるかが語彙の記憶に重要な役割を果たすことが分かる。

次に、語彙の学習や習得と一口に言っても、語彙には、知識の広さ (breadth) と深さ (depth) という2つの次元があると言われている。前者は、2000語語彙を知っている、あるいは3000語知っている等、視覚語彙 (sight vocabulary) の量の大小を意味する。一方後者は、1つの語彙の多様な側面をどれだけ多く知っているか。その浅さや深さに関係することを言う。語彙の広さについては、テキストの約90%をカバーする基本の2000語までは、授業で明示的に教えて、残りのいわゆる低頻度の語彙 (100回に1回出現) については、未知語推測で情報処理させるべきだと研究者もいる (Nation, 2001)。一方、語彙の深さについては、当該語彙について覚えるべき諸相が多様にあるという考えで、具体的には、発音やスペリング、語形、他の語との意味関係、使用域、頻度、統語的特性や連語的特性等が挙げられる (Quan, 2002)。例えば、語の統語的特性とは、“always” という語を文中のどこに挿入するかその位置についての知識等を指す。例えば、“She is in the library every weekend.” の文章中に “always” をどこに挿入するのか、といった知識である。

次に、語彙とその記憶の関係について取り上げてみたい。まずは、語彙の登場頻度と記憶の関係について。一体どれくらいの頻度で当該語彙に遭遇すればあるいはその語彙が登場すれば、語彙は定着するのであろうか。語彙の特徴によって違いはあると思うが、一般的には5～7回の間、あるいは12回程度 (Nation, 2014) であると実証研究では言われている。

それから語彙の記憶や定着に関する有効性の考え方としてリハーサル法 (rehearsal) というものがある。これは、語彙を学習した後に一定のインターバルで再度その後に遭遇することによって、その語の記憶がより強化されるという考え方である。この場合、そのインターバルは、語彙学習の直後、3日後、1週間後、1か月後という風に一定の間隔を保持して語の復習を行うことが大事になると言える。そうになると、英単語テストの実施がよく学校現場で行われるが、ある語を一度テストに出したら、その語を少し時間的な感覚を置いて次の定期テストで再提示し、記憶を強化する工夫をすることが語彙の記憶強

化に対し重要であるということになると思う。

ところで、これまで1つの語彙を覚えるに際し、記憶に困難を伴う語彙の性質としてどのようなものが考えられるであろうか。学習者自身にとっては、覚えることに困難な語彙の例として、“difficult”と“different”とか、“except”や“expect”等、を挙げる者もいるかもしれない。例えば、Laufer (1997) は、全体的な傾向として、綴りの形が似ているという要素 (similarity of lexical forms) が語彙知識の定着において、非常に障害になる要素の一つだとしている。

語彙を記憶し易くするにはどの方法が最も良いのか、効果的なのかという疑問についてこれまで明確な研究結果は今も出ていない。ただ一つははっきりしていることは、1つの語彙を記憶するのに、複数の方法を組み合わせて訓練することが有効であるということだ。例えば、ある語について、反意語や同意語を調べたり、語源を調べたり、語形の分析をしたりといった方法の組み合わせが有効という意味である。あるいは、学習したい語彙との係わりの程度が記憶に重要な影響を与えとも言われている。以下、語彙の記憶に貢献する3つの係わり度 (involvement) を示した研究の内容について触れたい (Laufer and Hulstijn, 2001)。

当研究では、以下の3つの要素の統合が語彙記憶に効果があるとしている。

①語彙の必要度 (need)

文字通り、学習する必要性が強いかどうかということ。例えば、野球では監督のことを“manager”と呼ぶ。では、部活動で洗濯やお金の管理を任されるマネージャーというのは英語では何と言うのだろうか。この疑問によって辞書で調べてみると“club secretary”というらしいと分かる。この作業によって、この単語の意味は比較的容易に頭の中に入ってしまふ。

②語彙の検索度 (search)

未知語を辞書で引いたり、その意味を教師に尋ねたりする行為を指す。

③評価 (evaluation)

ある特定の文脈に選んだ語彙が合致するかどうかを調べるために、当該語彙を他の語と比較したり、特定の意味を他の語と結び付けたりすること。具体的には、例えばリーディングにおいて、テキスト内での多義語の意味を推測・決定し、それを辞書で確認した後、自己の推測の有効性を確認すること。あるいは、ライティングにおいて、ある意味表現における語彙選択の適切さを確かめる行為を指す。

1つの語彙を記憶することにおいて、以上の3つの係わりが起これると、語彙の記憶のレベルは飛躍的に増大するとこの研究結果は述べている。いずれにしても、語彙の習得は、最初に発音やスペリングや意味といった部分的な知識を身につけ、その後、様々な文脈の中でそれらの語彙に触れることによって、知識や運用力がつき、語彙のより深い側面が内在化されるようになっていられると言われている。

6. 語彙の学習方法の種類

ここでは個人レベルで行なわれる語彙の学習方法、語彙の覚え方の種類を掲げ、その特徴を述べてみたい。まず、代表的なものとして以下の2つがある。

①意図的 (直接的) 学習法 (intentional vocabulary learning)

直接、語彙自身に焦点を当てながら、あるいは語彙自身を分析しながら語彙の数を増やしていく方法。例えば、語の反対語、同意語、同族語 (friend, friendly 等) の提示や単語構造の分析による学習方法。

②付随的 (間接的) 学習法 (incidental vocabulary learning)

英語を読み、書き、聞き、話といった4技能の行為の中で自然と語彙の数を増やしていく方法。

以上の①と②の方法については、両方を組み合わせて実行することが望まれる。①の方は、短期間に語彙の数を増やすには有益だが、文脈の中で語彙が提示されるわけではないので、語彙自身のニュアンスはあまりつかない。逆に②の方は、語彙のニュアンス等の習得には有益だが、覚えるのに時間がか

かり、語彙を数多く覚えるのには不利になる。つまり、①と②の語彙学習の方法は、相補的な方法であると言える。ただ、現実的にはこれら意図的、付随的な語彙学習方法の順序については、まず、①の意図的学習法によって意味の理解できる個々の語彙(単語)の数を着実に増やし、ある程度の語彙知識が溜まった段階で、次に4技能の活動を通して、文脈の中の語彙の意味範囲を次第に認識し理解していくというのが語彙を増やす自然の方法だろう。ただし、中学校段階のように語彙の意味が比較的簡単な場合には、最初から文脈内での語彙提示の手法も十分可能となると思う。

次に、以上の2つ以外の特徴のある語彙学習の方法の例をいくつか提示することにするが、要するに、語彙学習においては、記憶する際に、その語彙に関する記憶の引っ掛かりを作ることが重要とされている。これを精緻化(elaboration)という。そして、この精緻化活動としては、例文で語の用法を確認したり、発音練習をしたり、綴りを確認したりという活動が相澤(2017:12)により挙げられ、その他、当該語彙の反対語や同意語、一緒にしばしば現れる語、日本語との関係で語彙を記憶する方法等もある。以下もこの精緻化に関連した語彙学習の方法である。

③キーワード・メソッド(keyword method)や洒落で覚える方法

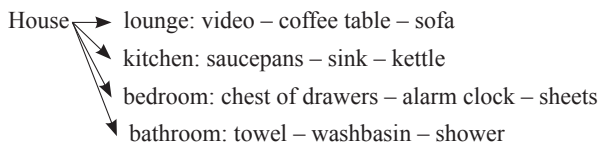
これは、学習している外国語の覚えたい語彙を学習者の母語に該当する語彙の意味と音とに関係付けて覚える方法で、欧米では非常に有効な方法だと考えられている。この方法は、別の言葉で言えば、洒落で覚える方法と言って良い。例えば、デモ暮らしの民主主義→democracy等がある(武藤, 1974)が、関係づける日本語のカタカナの音(デモクラシ)が英語の実際の“democracy”の音とは若干異なる場合もあるので、指導の際に注意が必要となる。

④概念で覚える方

語彙にはそれぞれ基本的な意味概念が存在する。コア・ミーニング(core meaning)と言っても良い。その概念が表す意味範囲を決定していると言っても良い。特に動詞については、意味概念を知ることによって、それに伴う連語等の意味把握も可能になる。例えば、“come”と“go”の概念の違いについて考えた場合、“come”には、「中心点に向かって次第に近づく」という概念的な意味があると言われている。一方、“go”には、「中心点から次第に離れていく」という概念的な意味を伴うと言われている。この2つの意味概念を頭に置いた上で、次のような状況を考えて見よう。例えば、家で母親が2階の部屋にいる子どもに向かって「夕ご飯ができたよ」と呼びかけたとする。すると子どもが「今、行くよ」と答えたとする。この場合の子どもの返答は、英語で“I’m going now.”となるか“I’m coming now.”になるかどちらだと考えた場合、“come”と“go”の意味概念を考えた場合、答えは後者の“I’m coming now.”になるだろう。なぜなら、この場合、子どもは母親のいる食堂に向かって近づいて行こうとしているからである。つまり、「食堂という中心点に向かって人物が近づいて行く」という概念を持つ“come”を使うということになるわけである。つまりこの場合、日本語は「行く」であるから“go”の選択が適切であるということにはならないのである。

⑤語彙をグループ化して覚える／語彙ネットワークで覚える(vocabulary mapping)方法

この方法は類似の範疇の語彙をグループ化して覚える方法で、この方法により、ある語を取り上げると、記憶の中から芋づる式に関連語彙が頭に浮かぶようになり、それだけ語彙の数とバリエーションも増えることになる。例えば、以下のように、家の中にあるものを英語語彙でネットワーク化していく方法がある(Harmer, 1991)。



⑥絵や写真と結びつけて覚える方法

近年では picture dictionary の様な多様な種類の絵や写真と英語を対応させた辞書が市販されているが、日常生活の中で頻度が高く現れる語彙等はこの辞書で視覚に訴えて実物に近い形で覚えるのが効果的である。

⑦語彙の暗記をする (rote learning, repetition) 方法

語彙をリストで覚えたり、日英語併記 (フリップの表に英語、その裏に日本語の意味を書いて覚える) のやり方である。オーソドックスな方法で昔からよくある方法であるが、この方法が意外に語彙の直接の記憶に有効であるとの研究結果があるようだ。

⑧4技能を使って覚える方法

見たり、聴いたり、読んだり、書いたり4技能を駆使して語彙を覚える方法である。付随的語彙学習方法と言っても良い。特に書きながら覚える方法は、より効果があるようである。

さて、これまで色々な語彙学習の方法を述べてきたが、教師はこれらの方法を学習者に適宜紹介して、どの学習法を選択するかは学習者自身に委ねるべきであろう。なぜなら、学習者の学習方法の好みというのは学習者の学習スタイルやストラテジーの問題もあって、個人的にそれぞれ差異があるからである。

7. 語彙の指導法について

語彙を実際にどのように指導すべきか、色々と方法はあると思うが、先に述べた通り、特に中学生段階では、新出語句の最初の指導において、英語を示してすぐに日本語の意味を提示する方法は避けて、なるべく文脈の中や学習者の身近な話題との関係で提示した方が良いように思われる。例えば、以下の例のようにである。

例 new (学習対象語)

Look! This sweater of mine is new. This is a birthday present from my wife. I like it very much because it has a nice door and a nice pattern. My car is also very new. So I polish it with water every week. "Polish" is "*migaku*" in Japanese. So what does "new" mean?

また、授業中の語彙の提示方法として、①実物で示す方法、②絵や写真で示す方法、③模倣やジェスチャーで示す方法、④その組み合わせ、等がある (Doff, 1988:13)。

次に未知語推測の指導について述べたい。未知語推測は語彙習得における有効な方法だと考えられており、学習者は教師より「分からない単語がある場合には積極的に推測しなさい」としばしば言われることがあるだろう。しかしながら、学習者の未知語推測の成功率はあまり高くないとの研究結果がある (Mondria, 2003)。未知語の推測の成否が、未知語を取り囲む周辺の語をどれくらいの程度で知っているかその割合に左右されるとされているからだ (Nassaji, 2003)。ある研究者は、テキストの全語彙における3%~5%の未知語率で漸く推測自体の成功率が高くなると言っている。そうなる、学習者の未知語推測の成功率を上げるためには、彼らの語彙力を高めるかテキストの難易度を彼らが理解できるレベルに合わせて選択する以外にはないことになる。さらに、実際に未知語推測は語彙力をつけるために有効だとも言われているが、やらせてみるとそれも意外に難しいようだ。語彙の推測が必ずしも語彙の深い処理水準に繋がらないためである。

8. 辞書指導について

最後に辞書指導について触れてみたい。英語の学習は、教師から知識やその説明を提示されたり、訓練を受けたりという側面もちろんあると思うが、その向上のほとんどの部分は、個人的な学習の努力に異存しているといっても過言ではない。もちろん、語彙の学習は、その定着に関して個人的な訓練が不可欠で、その場合、英語の辞書をいかに使いこなすか、その能力は特に語彙習得には重要になってく

る。

辞書指導として必要なことは、主に以下のような点に集約できる。

- ①辞書における語彙の配列の原則の習得
- ②辞書に含まれる情報の種類の理解
- ③情報の種類を表す文字記号の種類と意味の理解
- ④発音記号と実際の音との対応への気づき
- ⑤多義語の場合の意味決定の方法と例文の活用方法の理解
- ⑥4技能の活動における辞書の活用方法の理解

これ以外にも、例えば、リーディングの場面で未知語が現れた場合、当然、辞書を引くことはテキストの内容を理解するためには必要だが、分からない語彙が現れる度に辞書を引いていたのでは、文章のそれまで読んで理解した部分の内容も不明確になってしまう。したがって、指導としては、辞書を引く時に不明な語の品詞や意味をまず予測してから引いたり、あるいは、文章の大枠に関係した情報として主要な未知語だけを引かせる等、辞書引きの制限を掛けた方が語彙の習得にはより有効だと思われる。辞書使用には、語の分からない用法を知るために辞書を丹念に読み込む (dictionary reading) ということと、語の意味がたまたま分からないので参照する (dictionary reference) の2種類の機能があると言われている。

最後に、最近辞書活動の機器の主流になりつつある電子辞書について述べたい。現在では、コンピュータの普及もあって、内臓のコンピュータを使った多量な情報貯蔵と高速検索を特徴とした携帯電子辞書が普及し、学校現場でも使用する学習者が大半を占めるようになった。このような状況にあって、今や電子と紙の辞書の機能の比較しても決定的な意味を持たないことかもしれない。しかし、電子辞書の特徴や利点を挙げるとすると、次の6点になるとと思われる。①持ち運びに便利だという携帯性、②語彙検索の迅速さ、③それに伴い自然に辞書を引く回数が増えること、つまり使用頻度の増加、④多様な検索ができ、情報量も多いこと、⑤連語やイディオムが多量に関連語として示されるため、嫌でも多面的な表現に触れる機会の増加、⑥語の検索に伴い、音声情報も同時に得られる点、等である。逆に欠点とすると、情報の表示画面 (スペース) が狭く、一度に多くの情報を見ることができないことや多面的な情報が内蔵されている割には、基本的な情報しか大抵の場合利用されない、等が挙げられるだろう。

因みに、朝日新聞の2006年2月25日の“be on Saturday”, 6ページにおいては、電子辞書を選ぶ3つのポイントが掲載されていて、それによると、①収録辞書とサイズ、画面の見易さで選ぶ、②語学学習には音声再生機能のある機種を選ぶ、③後から他の辞書を追加できるものを選ぶ、が電子辞書の選択に重要とのことであった。

いずれにしても、電子辞書の登場で学習者が辞書を気軽に持ち歩き、手軽に語彙を検索する機会が増えたことは間違いない。それは是認されることだが、その一方で、深く辞書の情報を読み込み機会は少なくなったのではないだろうか。紙の辞書には一覧性、つまり、色々な一つの語彙に関する情報を1~2ページ内の紙面で得ることができ、マークするなどして、自分独自に必要な情報にチェックを付けることができる。これが紙の辞書の重要な特性である。一つの語彙についてどのような種類の情報が辞書中に記載されているのかを学べば、その利便性はさらに増すことだろう。その意味では、現場で一度は、特に入門期の段階で紙ベースの辞書指導の必要性は大きい。

とにかく、自律的な学習者を育てる観点から、時間的に制約はあるかもしれないが、是非とも何らかの方法で辞書の指導、あるいは手ほどきと言ったものを教師は授業中に行ってもらいたいものである。

9. おわりに

ここまで、語彙指導や習得の英語教育上の問題を総花的に論じてきた。英語教育において最も重要な

能力と認識され、また、実際的な英語の技能を運用する際の最も重要な能力ソースとしても認識されているながらも、その体系的指導の在り方もはっきりしていないのが語彙の世界である。それどころか、学習語彙の選定に関して語数の基準は学習指導要領で決められているとしても、具体的にどの語が選定されるべきかは決まっていない。扱う語の選定は各教科書会社の判断に委ねられていると言って良い。実際に、中学校の教科書で選ばれる語彙は2000語余りあり、その中で共通に選ばれている語は、約5分の1の語数にすぎないと相澤(2017:13)は述べている。こうした約5000語と言われる指導要領示された扱われる学習語彙の内容や種類の不明確さ、また、5000語の学習スケジュールの在り方等、語彙指導に関して今後考えるべき事項はたくさんある。

一方、今年4月に中田(2019)が『英単語学習の科学』を発売したが、この本の中では、過去に有効だと考えられていた語彙の指導法、あるいは逆に効果が疑問視されていたものが実証的に検証され、指導法への問題提起も行われていて、とても有益な書籍となっている。具体的には、テスト効果といい、語彙に関する質問に回答する方法が語彙の効果的な記憶法であるとか、語彙の集中学習と分散学習では、記憶した語の遅延効果があるのは分散学習の方であるとか、さらには、語彙を学習の間隔を徐々に広げながら行うリハーサル法に関して、この方法が長期の記憶保持を必ずしも実証されていない等である。

主張したいことは、こうした語彙学習に関する以前からの通説をきちんと検証する必要があるのではないのかということである。つまり、我々が良かれと思って現場で実施している指導方法に関してきちんとエビデンスを取る必要があるのではないか。ただし、教育的指導の効果等は教育環境の文脈に左右されることが大きいので、その解釈には慎重にならなければならないだろう。いずれにせよ、語彙指導や語彙学習について今後も多面的な研究と分析が必要なようである。今後の研究に期待したい。

引用文献

- 相澤一美(2017)「語彙習得を理解するための基本」『英語教育』65巻, 12号, 12-13, 大修館書店。
- Doff, A. (1988) *Teach English Teacher's Workbook: A Training Course for Teachers*. Cambridge University Press.
- Harmer, J (1991) *The Practice of English Language Teaching*. Longman.
- Hasegawa, Y. (2016) L2 learners' retrieval of pre-learned word meanings while reading in a new context. *ARELE*, 27, 233-248/
- Hatch, E and Brown, S. C. (1995) *Vocabulary, Semantics and Language Education*. Cambridge University Press.
- Laufer, B. (1997) What's in a word that makes it hard or easy: Some intralexical factors that affect the learning of words. In N. Schmitt and M. McCarthy(ed.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy*. (pp. 140-155) Cambridge University Press.
- Laufer, B. and Hulstijn, J. (2001) Incidental vocabulary acquisition in a second language: The construct of task-induced involvement. *Applied Linguistics*, 22(1), 1-26.
- Melka, F. (1997). Receptive vs. productive aspects of vocabulary. In N. Schmitt and M. McCarthy (eds.), *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy* (pp. 84-102). Cambridge University Press..
- 文部科学省 (2018)『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』文部科学省。
- 文部科学省 (2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』文部科学省。
- Mondria, J.A. (2003) The effect of inferring, verifying, and memorizing on the retention of L2 word meanings: An experimental comparison of the "Meaning-Inferred Method" and "Meaning-Given Method." *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 473-499.
- 武藤駿雄(1974)『英単語連想記憶術 第1集』青春出版社。
- 中田達也(2019)『英単語学習の科学』研究社。
- Nassaji, H. (2003) L2 vocabulary learning from context: Strategies, knowledge sources, and their relationship with success in L2 lexical inferencing. *TESOL Quarterly*, 645-670.
- Nation, I.S.P. (1990) *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle & Heinle.

Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary n Another Language*. Cambridge University Press.

Nation, I.S.P. (2014) How much input do you need to learn the most frequent words? *Reading a Foreign Language*, 26, 1-16.

Quan, D. (2002) Investigating the relationship between vocabulary knowledge and academic reading performance: An assessment perspective. *Language Learning*, 52(3), 513-536.

寺内正典・窪田三喜夫・小磯敦・森秀夫（編著）（1997）『リーディング・ストラテジー』三修社。